

これからの大学のトレンドを
\\ 大学事例から読み解く //

大学レポート 2015

教育は時代とともに変化していますが、特に大学教育は、
時代の変化の波を一番受けやすい場所といえるかもしれません。
国や企業に近く、国境を越えた大学間の連携や競争もあるためです。
大学キャンパスで今どんなことが起きていて、これからどんな変化が起きそうか、
大学全体をトータルに見る視点と、
個別の大学をつぶさに見る視点とから読み解いていきます。
お子さんの大学選択や将来の方向性を考える際の参考にしてください。

来春から「大学入試改革」が始まる!?
—今の高校生にも無縁ではない「高大接続」とは

グローバル教育 Global Education

神田外語大学..... p.36

教育改革 Educational Reform

國學院大學 p.38

帝京大学 p.40

キャリア教育 Career Education

千葉商科大学..... p.42

東京家政大学..... p.44

東京農業大学..... p.46

来春から「大学入試改革」が始まる!?

—今の高校生にも無縁ではない「高大接続」とは

文／渡辺敦司

現行の大学入試センター試験に代えて、1点刻みを排した「大学入学希望者学力評価テスト」（仮称）を導入すべきだとの提案が、昨年末、文部科学相の諮問機関である中央教育審議会（中教審）から答申されました。新年度の中学校1年生から対象になるといいますが、来春の受験生にとっても「大学入試」改革の話は決して無縁ではありません。東京大学の「推薦入試」や京都大学の「特色入試」にとどまらず、個別大学の入試改革が来春から徐々に始まる見通しであるからです。保護者世代の受験経験は、もう通用しない時代に入りつつあります。

わが子が受験するころには 一般・推薦・AOの区分が廃止？

中教審の答申をめぐっては1月、文部科学省（文科省）が「高大接続改革実行プラン」を策定し、その中で2020年度までの詳細な「工程表」も示されました。今後このスケジュールに従って、入試改革だけでなく高校教育改革、大学教育改革が着実に進んでいくことになります。今後は専門家会議が新テストの在り方を探っていきます。

注目すべきは、「各大学の個別選抜改革」です。国公私立を通じて大学入試の指針となる国の「大学入学選抜実施要項」について、16年度分から中教審答申を「順次反映」させるとしています。16年度入試といえば、今の高校3年生が受験する

来春のことです。

要項は通例5月中に見直され、文科省から各大学などに通知されることになっています。ですから改革初年度となる16年度の要項でどこまで変わるかは現段階では分かりません。しかし今年の新入生が大学を受験する18年度入試の要項までには、答申の趣旨が相当反映されていることは間違いありません。それでは、答申は何と言っているのでしょうか。主なポイントを見てみましょう。

- 主体性・多様性・協働性・思考力・判断力・表現力・知識・技能の「学力の三要素」から成る「確かな学力」を踏まえ、多面的な選抜方法をとる
- 入学者に求める能力は何か、そ

れをどのような基準・方法によつて評価するのかをアドミツション・ポリシー（入学者受け入れ方針）で明確に示す

- 高校の学習成果を、調査書などから確実に把握したり、活動報告書の提出や面接を実施したりする

- 一般入試、推薦入試、AO入試の区分を廃止する

このうち受験生にとって最も目を引くのが、入試区分の廃止かもしれない。私立入試では推薦・AOによる入学者が全体の約半数を占めるまでになっています。それが大学全入時代を迎え、実質的な「学力不問入試」になっているのではないかと、いう批判があります。

少なくとも責任を持って大学に

受け入れる以上、一定の学力を把握すべきであり、そのために入試区分を廃止したり、19年度からは高校版全国学力テストとも言うべき「高等学校基礎学力テスト（仮称）」を創設して高校段階の学力をしっかりと測定したりすることを、答申では求めています。

センター試験に代えて新設 「学力評価テスト」とは？

難易度や競争率の高い大学も例外ではありません。先に挙げた「学力の三要素」は、高校はもとより、大学でも育成すべきものだと言及されています。とりわけ最近、トップクラスの大学でさえ「学生がものを考えようとしなくなった。すぐに正解を聞きに来る」と嘆く教

図1 大学入学希望者学力評価テスト(仮称)の概要

目的	これからの大学教育を受けるために必要な能力について把握する。「確かな学力」のうち「知識・技能」を単独で評価するのではなく、「知識・技能」の活用力を中心に評価
対象者	大学入学希望者(社会人も含め、誰でも受験可)
内容	<ul style="list-style-type: none"> ● 教科型に加えて、「合教科・科目型」「総合型」の問題を組み合わせる ※将来的には「教科型」は廃止 ● 段階別表示による成績提供
回答方式	多肢選択方式だけでなく、記述式を導入
実施方法	<ul style="list-style-type: none"> ● 年数回実施 ● 英語は民間の資格・検定試験を活用

中央教育審議会 第95回 2014.11.20 資料より作成

員の声が聞かれます。これからの大学教育では、正解のない課題を自ら見つけ、自分なりの解決方法を見いだしていく力を付けさせようとしている中では、深刻な問題です。

東大や京大が16年度から一部の募集定員とはいえ大胆な入試改革に踏み切る方針を発表したのも、そうした危機感が背景にあったと言えます。一定の学力は必要だとしながらも、後は多様な尺度で評価して、学生に多様性を持たせ、入学後にお

図2 大学入学希望者学力評価テスト(仮称)の今後の予定

29年度(2017)	「新テストの実施方針」策定(初頭)
30年度(2018)	プレテスト実施(30年度中)
31年度(2019)	本テスト「実施大綱」(31年度初頭)
32年度(2020)	本テスト実施

高大接続改革実行プラン 2015.1.16 文部科学省

互い切磋琢磨させて教育効果を高めたい、という考えです。

高校・大学を通じて三要素をバランス良く育成するとすれば、「知識・技能」の二要素のみに偏った1点刻みのペーパーテストだけで入学者を選抜する「大学入試」をいつまでも続けていてはいけない、というのが中教審の問題意識です。

そのため、センター試験に代えて新設する「学力評価テスト」では、教科にとらわれない「合教科・科目型」

「総合型」の問題を出題するとともに、成績提供を点数ではなく段階別に表示することにしたのです。これにより思考力などを測ることができただけでなく、大学側も1点刻みで可否を判定できなくなるため、必然的に調査書や面接結果など多様な資料を集めることを余儀なくされるわけです。

1点刻みの可否判定でない選抜で、公平な入試になるのか——と疑問に思われることでしょう。受験競争が厳しかった時代に学生生活を送ってきた保護者の世代はもとより、今の大学・高校関係者の多くにもそうした声は根強くあります。

しかし答申はあえて、そうした「公平性」をめぐる社会の意識を改革し、多様な力を多様な方法で「公正」に評価し選抜することが必要であるという意識を醸成していくべきだ、としています。これからの厳しい時代を生きる生徒・学生に必要な力を付けさせるため、あえて社会の観念に対して挑戦状をたたきつけるとともに、それを実現する改革方策を断行しようとしているのです。

**授業、体験、課外活動…
高校生活全体が重要に**

ところで、中教審答申の正式名称

は「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の」体的改革について」といいます。ここからも、単なる「大学入試改革」を目標とした答申ではないことが読み取れます。

そればかりか、答申には「『高大接続』の改革は、『大学入試』のみの改革ではない」と、はっきり書いてあります。現行の入試が改革された後の姿は、もはやペーパーテスト中心の「入試」ではなく、多様な評価に基づく「入学者選抜」なのです。

大学入学者選抜は、ゴールではありません。大学に入ってから教育を通して、どのように社会で通用する能力を付けるかが問われているのであり、そうした大学教育を受けるに耐え得る力を付けることが、高校教育に求められているのです。

それは決して「受験学力」だけで足りるものではありません。アクティブラーニング(※)を含めたさまざまな授業や、さまざまな校内外での体験活動、さらには課外活動など学校生活の全体を通じて身に付くものです。そうした能力を丁寧に評価して選抜しようとするのが、今回の「高大接続改革」なのです。普段の高校生活を一生懸命過ごすことが、ますます重要になってくるでしょう。

※調査や討論、グループワークなどにより課題発見・解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習